時評

刷り込まれる差別

矢部雅之

詳しい事は言えないのだが我が家では今、国際結婚が破綻したある家庭の母子に滞在してもらっている。それを通じ、人種差別について改めて考えさせられる処があった。

幼稚園に通う四歳のその子が、朝食を我家でとっていた時のこと。突然、「あなたは英語が喋れないでしょ。私は英語が喋れるの」と言いだした。それも、蔑むような自慢げな顔で食卓の一人一人に向かって強調したのだ。嘲笑しているとさえ見受けられる表情で。

普段の、子供らしい無邪気な明るさとは全く性質の異なる、冷やかな悪意さえ感じさせる言動だった。狼狽えて止める母親を振切り執拗に、何かに憑かれたかのように、同じセリフを繰返す様は、どこか異様ですらあった。

看過できない〈根〉を感じ妻と話し合う内に、原因と思われる事情が浮かび上ってきた。

その子はちょうど前日、別居中のアメリカ人の父親との面会日で、父やその両親と週末を過ごしてきた後だった。振返ってみるとその子は、面会後、父親の家での様子について母親から尋ねられても毎回、固い表情をして何も話さない。本人が直接の虐待を受けている様子はなさそうだが、もしかすると面会日にこの子は相手方の家庭で、日本人への蔑視を含んだ言動に接しているのではないか。

そう考えると、その子の母親から聞いていた話と符合する所があった。彼女は、同居していた夫の母親からしばしば「何年もアメリカにいるのに全然英語が上手くならない。勉強しない怠け者だ」と罵られたり、コメの料理を食卓に乗せると「こんなジャンクフードを子供に与えるな」と捨てられたり、といった扱いを日々受けていた、というのだ。

祖母の、差別的な態度をずっと目にしてきたその子には、日本人は英語が出来ないという先入観、英語の出来ない者への蔑視を当然とする価値観、祖母らの蔑視の対象である日本人の母やその子である自分自身を素直に肯定できない感覚、蔑視から自分を守るためにその蔑視に進んで加担する姿勢、…といった、差別にまつわる様々な心理が刷り込まれてきていたのではないか。そう考えると、多くの事の辻褄が合うように感じられた。

子供に刷り込まれていく無意識的差別。そして差別的価値観を受け入れなければその子の居場所が無くなってしまう現実。それを思うと、大人が示す意識的な差別に接する時とは違う、暗く重い気持ちになった。また、自らのアイデンティティに不安を抱きながら成長せねばならないその子の将来も案じられた。

それにしても、この祖母の態度の何と残念なことだろう。聞けば、この祖母の親も移民として大変苦労をしたそうだ。苦労は、同じ境遇にある他者への理解に必ずしも繋がらないということか。異国からやってきて言葉や文化の違いに苦労し努力しながら生活を切り開こうとしている人を、子供の前で、自分はアメリカに生まれ育って英語ができるというだけのことを根拠に「英語も出来ない劣等民族」と蔑んで見せるのと、「あなたを愛しみ育むためにお母さんは、言葉もわからない国に渡ってきて懸命に努力してくれているのよ」と言い聞かせてあげるのとで、その子の未来に、そしてまた（決して大げさでなく）人類全体の未来に、どれだけの違いが生じるか知れないのに。